「言葉つむぎ屋」

―２稿―

2025/4/1

雨森　れに

〈人物表〉

高崎　紬（つむぎ）　（30）代筆屋

吉沢　なな　（27）高校教諭

橘　良喜（りょうき）　（18）吉沢に告白した男子生徒

1.

代筆屋・書斎（夜）

応接間を兼ねた広い書斎。窓を背にするようにデスクが置かれ、その前に来客用のテーブルと椅子がある。壁側には大きい棚があり、筆記用具やレターセットが収納されている。

棚に便せんをしまう高崎紬（３０）。

電話が鳴る。

紬　「はい。代筆屋でございます」

2.

代筆屋・外観（昼）

古い造りの一軒家。

開かれた門扉の先には小さい庭があり、春の花々が咲いている。

玄関に「代筆屋」という小さな看板がかかっている。

吉沢なな（２７）がインターホンを押す。

3.

代筆屋・書斎（昼）

吉沢　「すごい。全部代筆用のですか？」

来客用の椅子に座る吉沢なな。

筆記用具やレターセットの量に圧倒されている。

紬が紅茶を提供する。

紬　「時々、使う前に寿命がきちゃうものもあるんですよ」

吉沢　「それは勿体ないですね……」

紬　「先代と代替わりした時なんて、裏から高級紙がわさわさっと。紙が金塊に見えました」

吉沢　「先代。ということはお母様かお父様が？」

紬　「いいえ。叔母です。子供がいない人だったんで、私が継いだんです」

吉沢　「そうなんですね。こんなこと聞くのもアレなんですけど、主になんの代筆をされてるんですか？」

紬　「季節の挨拶状や家系図の書き直し、もちろん手紙も。いろいろですね」

吉沢　「でもきっと、私みたいなのは稀ですよね。とってもずるいお願いですもん」

吉沢、紅茶に視線を落とす。

吉沢「教師の癖に、告白の返事ひとつ書けなかったんです」

紬「生徒さんにですもんね。それは慎重になりますよ」

吉沢「そうなんです。しかも人生で初めて経験したもので、うまい断り方がわからなくて」

紬「それで、咄嗟に返事を卒業式まで延ばしてしまったと」

吉沢「完全にやらかしました。逆に期待させちゃいますよね？」

紬「うぅん。もしかしたら……」

吉沢、やっぱりというように肩を落とす。

紬「お返事は、本当に代筆の手紙でよろしいんですか？」

吉沢「（少し考えて）はい。直接伝えるとテンパると思うんです。ここまできて変な意地なんですが、センセイらしい言葉を贈りたいんです」

紬「最後まで立場を貫く、というのは思いやりですね」

紬がノートを開く。

紬「センセイとして、後悔のない手紙にしましょう」

× × ×

テーブルには空になったティーカップ、お菓子のゴミがある。

紬「吉沢様から見て、橘様にはどんな魅力がありますか？」

吉沢「えっ。そういうことも書くんですか？」

紬「そうですね。一般的なラブレターの返事でやってしまうと、期待を持たせてしまうのでよくないんですが――」

吉沢「（焦って）じゃあ駄目です！　ナシナシ！」

紬「教師として距離を置くなら、あなたの頑張ってるところを認めている、という大人の目線にできます」

吉沢「親目線みたいな？」

紬「はい。たとえば『優しくて、何にでも一生懸命なところが素敵だ』だと期待させますよね？」

吉沢「そう思います。褒めるとダメな気がしちゃう」

紬「じゃあ、『これから先、あなたの優しさや一生懸命なところに惹かれる人が出てくるでしょう』だと？」

吉沢がハッとした顔をする。

吉沢「未来を応援するニュアンスになってる」

紬　「吉沢様の考えてるセンセイに近くないですか？」

吉沢が泣きそうな顔になる。

吉沢　「私、こういう言葉選びがヘタクソなんですよね。教える側の人間として情けないです」

紬　「そんなことないですよ。誰もが抱えている悩みです。でも、誰かを介したら意外とうまくいくことも」

吉沢が紬を見る。

紬は微笑み、頷く。

紬　「だから私がいるんです」

4. 代筆屋・外観（夕）

空が薄暗くなっている。

玄関から出てくる吉沢。

吉沢は、玄関の内側にいる紬にお辞儀して帰る。

5. 代筆屋・書斎（夕）

秒針の音。壁掛け時計が18時を指している。

紬が、デスクで手紙の下書きをしている。

デスクには、下書き用の便せんと、吉沢から聞きだした内容が書かれたノートがある。

紬が下書きを終える。

下書きとノートを見比べ、考える。

なにかを思いついた様子で、棚へ。

棚からトレイを取り出し、別の段を物色する。

トレイに水色のレターセットが乗せる。次に黒ボールペン、万年筆、ガラスペン、インク瓶を乗せる。

紬がデスクに戻る。

下書き用の便せんを使って試し書きを始める。

まずは黒ボールペンで波線を書く。

紬が難しい表情で首を傾ける。

つぎに万年筆で波線を書く。

やはりしっくりこないというような様子。

最後にガラスペンにインクを吸わせ、書く。

紺色の波線に、納得いったように頷く。

深く深呼吸し、レターセットに手を伸ばす。

6.

代筆屋・書斎（昼）

吉沢　「これ、すごくいい色ですね」

吉沢が封筒を眺めている。

紬　「気に入っていただけて何よりです。まだ封をしていないので、中身も確認してください」

吉沢、意を決するように姿勢を正す。

便せんを手にし、無言で読み進める。

紬は、真剣な面持ちで見守る。

吉沢が読み終わり、紬を見る。

吉沢　「私が言いたかったこと、ぜんぶここにありました」

紬　「書き足しや削ることもできますよ」

吉沢　「（首を振る）理想のセンセイの言葉だと思います」

吉沢、自嘲気味に笑う。

吉沢　「ずっと、考えてました。なんで自分でうまく書けないんだろうって」

紬は無言で吉沢を見つめる。

吉沢　「教師の癖に書けない。書いても何が言いたいかわからなくなる――自分のプライドのためにここを頼りました」

紬　「もしかして、後悔してますか？」

吉沢　「ごめんなさい。やっぱり、ずるいって気持ちが……」

紬、デスクからノートを持ってくる。

紬　「こんなにご自身と向き合ったのに、ずるいことはないと思います。私は、あくまで代筆屋ですから」

吉沢、驚いた表情をし、そのまま顔を伏せる。

吉沢　「ありがとう……」

7.

学校・外観（昼）

校門に「第５２回　卒業式」の看板が立っている。

吉沢Ｍ「橘くんへ。卒業おめでとうございます」

吉沢が帰宅する生徒たちに手を振る。

吉沢Ｍ「先日は勇気を出して気持ちを伝えてくれて、ありがとう」

8.

学校・廊下（昼）

吉沢が廊下を歩いている。

吉沢M「私のことをそんなふうに思ってくれていたこと、本当に嬉しく思います」

9.

学校・教室（昼）

空き教室。吉沢が空を眺めている。

吉沢M「ただ、ごめんなさい。橘くんの気持ちを大切にしたいからこそ、正直にお伝えします。私は先生という立場であり、生徒と特別な関係になることはできません」

ドアが開く。

やさしく微笑む吉沢。

吉沢M「これから先、あなたの優しさや一生懸命なところに惹かれる人が出てくるでしょう」

吉沢の手が封筒を差し出す。

橘良喜（18）の手が封筒を受け取る。

吉沢M「今は、夢に向かって努力し、自分自身を成長させることがとても大事な時期だと思います。その頑張りが、未来の橘くんをもっと素敵な人にしてくれるはずです」

橘が吉沢にお辞儀して、足早に去っていく。

吉沢M「私は先生として、これからも橘くんをずっと応援しています」

吉沢、また空を眺める。

空は透けるほど青く、雲が穏やかに流れている。

10.

代筆屋・書斎（昼）

窓のレースカーテンが揺れて、時折青空が見える。

デスクの上には何もない。

電話が鳴る。

紬　「はい。代筆屋でございます」

おわり